

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
閲覧を禁じます



大好きだった幼馴染は
魔物堕ちしてしまいました

鬼畜×純愛

墮落の花嫁

カンテラの喫茶店

「おはようサライ」

「あっ、おはようサライ」

彼女は幼馴染のサライ。
家が隣で、小さい頃からよく世話を焼いてくれる、年上の女の子だ。

「ふふふ、寝癖がついてるわ」

「え？ あつと……」

「直しておげる。後ろむいてっ」

「ああ、ありがとっ」

サライの柔らかい手が俺の髪に触れる。



「……ごめん、ユウさんの背が高くて届かないや。ちよっとだけかがめる？」

「ああごめん！……これくらいで大丈夫？」

「うん大丈夫、ありがとっ」

そういえば、サラを上から見下ろせるようになったのは、いつからだろう。昔は俺の方がずっと背丈が低かったが、いつの間にかサラが小さく見えるようになった。

「はい、直ったよ。これでもう仕事場のおじさんに笑われないね」

「それって昨日の……見たの？」

「見ただよ」

寝癖なんてどうでもいいが、何だかものすごく恥ずかしい。



「……顔赤くなってる。恥ずかしいの？」

「そりゃあ恥ずかしいよ。何で？」

「だっていつも寝癖立ててるから、気にしてないのかと思ったんだもん」

「サシだから恥ずかしいんだよ」

「……」

「あぁ、いや、何でも……」

「もったいぶってないで言っただけよ」

背中をポ「ポ」と叩いておちよくってくる。
まったく、可愛い幼馴染だ。
俺にはどうも不釣り合いな気がしてならない。



「どうしたの？ こんなところ呼び出して」

「うや、えーっと……」

「何か悩みごと？ 私で良ければ相談このまゝ」

「えっとさ、驚かないで聞いて欲しいんだけど」



「俺と結婚してください！」



「……へ？」

「俺、小さい頃からサラの好きだったから！
これからも一緒にいてほしい！」

「わ、私なんかでいいの……？」



「嬉しい……！
私も小さい頃からユウくんが大好きだったから……！」

「ほ、本当……♡」

「うん♡
……それにユウくん、私がないと心配なもの」


「ほ、ほ……！」



「本当、ユウくんからそんな事言ってくれるなんて……
これっぽっちも思ってたわ。これからはずっと一緒♡」

「お、俺だって断られると思ってたし……」

「ふふふっ、えらいえらい♡」



「そういえば、ママとパパがしばらく街に出ていて、家にいないの」

「えっと……それはつまり……」

「……寄ってらんか」

「うん……」

「ふふっ、顔が赤いわよ」

「だって……そういう事だろっ」

「……そういう事」
「♥」

「サラの乳……前々から思ってたけど
やっぱりエカがよな」

「は、恥ずかしい……」

「何で、村で一番だつて男だつては
人気なの？」

「だつて牛みたいだし……。
というか何その話。そんな話してるの？」

「……まあ……」

「私、ユウくんだけ見られていたい……
ユウくん以外にそういう目で見られるのは……」

(うんうん……)





「うんぬん」

「うん...あ...」

「うぬぬ」

「♡...は...ん...ん...」

うんぬん

うんぬん



「んっ……ほっ……あっ……
コウ人の手……気持ちSSS……
頭がウラウラしている……」

はっ

んっ

あっ



「んんんっ♡」

「っわっわ 何か出たみたい」

「ごめんなさい……私、イクと母乳が出る体質みたいで……牛みたいで変だよわ……」

「全然そんな事ないわっ！すいしほすー」

「ほんと……っ、ユウくんが喜んでくれるなら……♡」

んんん♡

おっぱい♡



「んっ、じゃあ今度はユウくんが気持ちよくなる番ね……。
んっ、んっ、ユウくん……♡ ユウくんの……意外と大きくて……
口に入れるのが大変……んっ、んっ♡」

「んっ、んっ、ユウくん……♡ 気持ちいい♡」

「んっ、すいっく……♡」

「そう、よかった♡」



「ユウくん……来て……」

「怖くない？ 大丈夫？」

「怖いけど……ユウくんだから大丈夫。
早く一緒にになりたい……♡」



「んっ……うっ……んっ……」

「血出てる……サラ、処女だったの？」

「だって……ユウくんじゃないと……好きな人としかしたくないもの……」

「そんなに俺の事好きでいてくれたなんて……嬉しい。もう少し頑張って」



「んっ、あぁッ！ お腹の中に……ユウくんが……入ってる……。
痛いけど……幸せ……」

はっ

あーん



「はあッ、んっ、ああッ♥
ユウくん、ユウくん、のっ、がっ、はあッ.....♥
入って.....んんッ.....♥
あっ、はっ♥」



「んっ……気持ちよすぎて……体が動かない……
ずっとイキッばなしで……頭がぼおっとする……」
「♡♡」



「んっ、ユウくん♡」
ユウくん、ユウくん♡
はっ、んっ、んっ、んっ♡
ゆうくんっ♡
ユウくんの熱いの、
私のナカですごく♡
ビクビクしてて♡
んっ、ああっ♡
んっ♡
はっ、ああッ♡

ズッ

んっ♡

んっ♡

んっ♡

「ふふっ、見て、ユウくん♡
私のナカにユウくんのおち○ほ入ってるの♡
すごくえっちなよね♡」

私のナカで何回もびくびくんって
イッチやってるのっ……

私もユウくんのおち○ほで
たくさんイッチやっただよ♡

こんな私、はしたないね……
でもユウくんにだけだよ♡」



— 数日後

「どうしたの、お休みの日にこんなところで……しかもこの格好……」

「サラに似合うと思って」

「もうっ……ユウくんはこういうのが好きなの？」

「だってすごく似合ってるし……すごくエッチだよ。……もしかして嫌だった？」

「嫌じゃ……ないけど……。
ユウくん、こういう感じの服を着た
女の人なら、誰でも良いのかなって……」



「そんなわけないだろ！」

「あつ、もつっ、ご、こんなところだつ！
誰かに見られたら私……！」

「大丈夫、ここは人通りが少ないから」

「でもっ、んっんんッ♥」



「……なんかサラ、
今日はやけに締まりが
よくない?」

「そ、そう……?」

「いつもより感じてるみたいだし……
もじかして野外が好き……とか?」

「そ、そんなこと……!」

「でも本当は、
誰かに見られそうなのに
興奮してるでしょ?」

「ち、違うわ……!」



「……冗談だよ」

「もう、ユウくんだったら……そんな悪い子にはおしおきだよ」

「うっ……」

「んっ……ユウくんのおいがする……」

「んっ、ふっ、んっ……ユウくんユウくん
ユウくんだいすき♡
んっふうんっ、んっ♡♡」



— 数日後

「ぎゃあッ!」

突如現れた触手型モンスターによって村は壊滅。

「く、苦しい……ッ!」

「サラ!」

「ユウくん!」

サラを助けようとするが成す術もなく、
モンスターに苦しめられている様子を
ただ見ていることしかできなかった。





「……………んじゅんじゅん……………」

「きやあッ!!
な、なにこれ!!?」

「み、みんな
モンスター^{II}の赤ちゃん
生まされてるの……………?」

「いやっ……………早く逃げなきゃ……………」



「や、やめて……!!
そんな大きいの入らな……ぐえッ!
あつ、いだい、いだつ……ああッ……
やめでッ……抜いて……ああッ……うっ……」



「あがっ……うぐっ……」

い、いだっ……ああああッ！

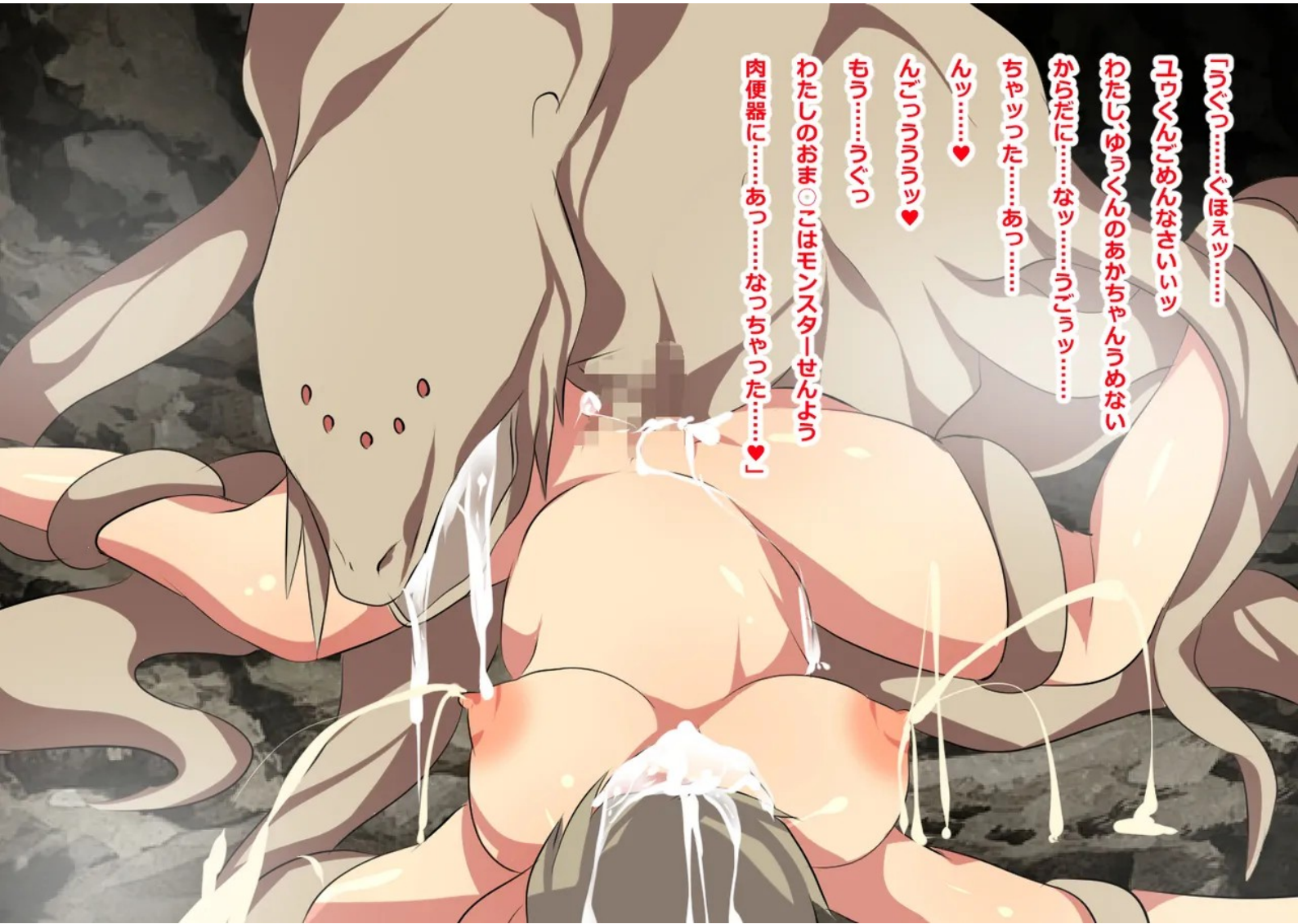
し、しんじやう……うっ……ああッ……

おなかのナカぐちゃぐちゃにされて……うぐっ……

しんじやう……」



「うーっ、こんなっ、こんなことされたら私……
ユウくんと赤ちゃん産めなくなっちゃ……アッ……うう
うーっ……あっ……はッ……んあッ、おなか……いた……アッ……」



「うぐっ……ぐほえッ……」

ユウくんごめんなさいいッ

わたし、ゆうくんのあかちゃんうめない

からだに……なッ……うぐっッ……

ちゃッつた……あッ……

んッ……♥

んごっうううッ♥

もう……うぐっ

わたしのおま○こはモンスターせんよう

肉便器に……あッ……なっちゃつた……♥」

「ん、んごおおおオオッ……!!

モンスターのザーメンがおナカにあがッ……

ああああはッ♥

ユウくんんんッ♥

ユウくんだいきゅっくんあッ

ん「おおああんッ♥」

「えへへっ♥

いっばいでたねえゅっくんあがッ♥

うふふんぐっ♥

あッ、あッ、があッ♥「

「モンスター、モンスターだ！
村にモンスターが入ってきたぞ！」

「きゃああ！ 逃げてっ！ 早く殺してっ！」

「アッ……ウクッ……ンクッ……」

「……おい、もしかしてお前……
サヤ……っ」

「アガッ……ウケッ……
ユ……ユウケン……」

「おい……そんな……
嘘だろ……サヤ……
そんな体になつて……サヤ……」

「ウグッ……ユウケン……
ユウケンダイスキ……ウフフフ♥」

fin











































































































































































































































